

活水女園の変遷を支えた人たち

前田 志津子¹⁾ 井 英明²⁾

The People Who Supported the Transition of KWASSUI JOEN

Maeda Shizuko I Hideaki

Abstract

In the report “An Examination of Kwassui Joen in Koga village” the location of Kwassui Joen in Koga village was confirmed. The reason for the move from Kumamoto to Koga village in Fukuoka Prefecture was found to be the donation of land by Kinugasa (maiden name Omura) Masuo who graduated from Kwassui Women’s School in 1895 (Meiji 25). Furthermore, we found information regarding Kinugasa Masuo’s father-in-law, Kinugasa Keitoku. This paper will investigate Kinugasa Masuo who donated the land, her father-in-law Kinugasa Keitoku, and unravel the connections with those concerned. This research clarifies the history of the origin of Kwassui Joen in Kumamoto, its move to Koga village and subsequently to Omura.

Keywords: Kwassui-joen(residential child care facility), Elizabeth Russell, Kinugasa masuo, Kinugasa keitoku, Kumamoto. Fukuoka, Nagasaki

はじめに

『古賀村と活水女園についての検討』の報告では、古賀村での活水女園の場所が確認できる。そしてなぜ熊本から福岡県古賀村に移転しているのか、その理由については衣笠（旧姓大村）マスオより土地の寄贈があったことによると分かった。

衣笠マスオは、1895（明治25）年活水女学校の卒業生である。そしてまた、衣笠マスオの義父となる衣笠景德の存在が大きく関わる事が確認できる。

本論文では、当時の災害状況、そのことによる孤児院設立、「活水女園」の起点となる熊本から福岡県古賀村へ、その古賀村の土地を寄贈した衣笠マスオ、その義父である衣笠景德について述べるとともに、それらの関係者とのつながりをひも解くこと、そしてその後、古賀村から大村へつないでその歴史を明らかにする。以上が研究の目的である。

1. 孤児院設立に至る原因としての災害状況

『活水五十年史』には「明治 26 年（1893）島原湾海嘯の際熊本側の沿岸で多数の孤児が寄るべなき運命を嘆いていることを耳にした時、女史はどうしても座視するに忍びなかった。直に進み出て 15 名の無告の女兒を引受けた、是が「活水女園」の抑の起りである。」とある。なお文中の「海嘯」とは河口に入る潮波が垂直壁となって河を逆流する現象で、潮津波ともよばれる、この「明治 26 年島原湾海嘯」を起因とする災害を活水女園開設の発端と説明している。

『活水学院百年史』では『五十年史』の記述を踏襲しつつも「1893（明治 26）年島原地震の際、津波に襲われた熊本側の沿岸で多数の孤児が路頭に迷っているのを聞いた女史は見すごしにするこ

¹⁾ 活水女子大学

²⁾ 古賀市教育委員会

とができなかった。」とあり、「島原地震の際、津波に襲われた熊本側の沿岸」と記されている。厳密には『五十年史』に「島原湾海嘯」とあるものの、地震による津波と限定されているわけではなかった。しかし、『百年史』では「島原地震（を起因とする津波）」となっている。

ここで想起するのは1792年5月に発生した島原地震、いわゆる「島原大變肥後迷惑」と言われているのであるが（年表参照）、これは活水女園開設から100年以上前の出来事であり、二瓶浄幸氏が『大島サキと活水における最初のリバイバル』で指摘するように関係性を考える必要は全くないと考える。また、活水女園開設年に近い時期では、1889（明治22）年7月28日発生の本州地震（M.6.3）が最大の地震災害で、人的被害は死者20名を数えるが、津波被害は生じていない。そしてこれを上回る地震災害は、前後数年間を概観しても発生しておらず、別の災害を考える必要がある。

『長崎県福祉の歩み』には「明治26年に有明海に台風が来襲し、口之津港の石炭船70隻を始め熊本県長洲港の漁船などに未曾有の沈没被害が発生した。ことに、長洲方面の漁民のなかに路頭に迷う遺族が溢れ、多数の孤児が出た。」とある。

これは、1893（明治26）年10月に上陸した台風のことと考えられる。なお、この時代には、まだ「台風」の用語はなく、「大風」や「野分」、「暴風雨」や「颶風」等とよばれていた。したがって、「台風（総務省消防庁のデータベース「全国災害伝承情報－現在までに語り継がれる『災害』について」では『明治26年台風2号』と報告する）」は後世に付けられた名称である。しかしながら、災害を端的に示す語として、以下では「台風」の用語を使用する。『日本災害史事典』には「風水害（北陸地方、近畿地方、四国地方、九州地方）10月13日、西日本で風水害、台風。豊後水道から四国沖へ抜けた。大分県内では連日雨が続き、河川の堤防が決壊し大洪水となった。また、高潮、高波に襲われた。死傷者は1,719名以上に上がった。

『大分百科事典』には「10月県下は未曾有の大暴風雨に襲われる（台風）」、『長崎県大百科事典』には「台風、口之津石炭船70隻沈没」等とある。このように、何故か、最も甚大な被害を出したと考えられるが、『熊本県大百科事典』に記載はない。そして『内務省統計報告 第9巻（明治26年）』には、この台風被害に限定しているわけではないが死者数が挙げられており「鳥取県242、島根県33、岡山県421、広島県44、山口県35、大分県259、熊本県8人」とあって、熊本県の死者数は極めて少ない。

また、『日本歴史災害事典』には「台風（死1,898以上、このうち熊本827、大分266、島根54、岡山423、鳥取328など）」とあり、被害の詳細はわからないが、明治26年10月13日から同月16日まで猛威を振るった台風があり、その被害は人的被害のみを見ても、1,719～2,098名に及んだことが分かる。そして、被害者数が最も多いのは熊本県で、死者数827名の甚大な被害が発生している。この台風に関しては、前田哲之助氏が『長洲の漁業』において最も詳しく報告・分析を行っている。前田氏は熊本の観測データにある風速16mと記されている点に疑問を抱き、長崎、佐賀などが25m以上の風が5時間以上も続いていることから「資料から総合的に判断しましても、有明海上でも20～30mの風が、それも長時間吹いたものと思われる」としている。

『明治ニュース事典 第五巻 明治26年－明治30年』に明治26年10月17日付で「長洲町の漁民遭難一生存わずか五十三人」の九州日日新聞社の義金募集広告記事があり、この台風来襲により玉名郡長洲町で甚大な被害があり、人的被害のみでも約330人（327～331）の死者があり、熊本県全体の死者数827人の内、約40%を占めていることが分かる。

なお、『明治ニュース事典 第五巻』の資料編「水災潮災及暴風被害」から、この明治26年の欄を見ると、『水災』の事項に「氾濫面積318,749町 建物323,825棟 船舶2,783隻 死亡1,341人 負傷1,500人 諸損耗額14,383,908円 復旧費6,366,930円」とある。明治26年、この台風被害以外に大きな災害は記録されていない。ただし、死亡者数は1,341人で、他記録に照らすと最も少ない。分類もしくは統計処理上、計上する数に違いがあるのかもしれないが詳細は分からない。また、明治時代の水災被害でこれを上回る災害は死者数で見るとかぎりない。

以上から、『活水五十年史』の記す「海嘯」は地震を原因とするものではなく、台風を原因とする高潮そして潮津波であった可能性が考えられる。ただし、この台風は活水女園開設が9月とされるのに対して一月後の10月来襲で、活水女園開設の直接的な契機とはなり得ない。

『明治ニュース事典』に「遺族たる妻子に至りては、また今より誰によって活を求めん、その窮餓の惨状実に見るに忍びざるなり。」とあり、赤痢流行の記事を認めることから、衛生環境悪化による2次的被害も多くあったとも考えられる。したがって、困窮極まりない状況は理解できる。

二瓶氏は、1892年発行『女学雑誌第304号』に掲載された長崎通信の記事を引用した『活水同窓会の歩み』では、「大島咲子、井上政子右両氏は（濃尾地震）震災地負傷者の惨苦を傍観するに忍びず、昨年（1891年（明治24））11月16日九州を発して該地に赴き看護に尽力し居たりしが、去る1月23日当地活水女学校迄帰り来られたり。両氏は市の枝に十日間、一の宮に四十二日間滞在して、熱心に看護せられしが、其懇切にして活発なる働きには孰れも感心せざるなく、該地出発の時などは、患者は袖にすがりて離別を惜しみしと言ふ。両県庁よりは特に商品若しくは賞状を附与して其功を賞せられし由、又該地より八才の一少女を携え来りて活水女学校に教育方を依頼されたり。此少女は下腹部に大傷を蒙り、其上半身泥砂に埋まり居る所を、他人に救上げられ、後両氏等の看護によりて全癒に至りしもの由なるが、後々には賤業に貶めらるるの恐れありしを憂て、両親納得の上遂に此地に連れ帰られしなりと言ふ。」との記述がある。（カッコは筆者）

また、「1893（明治26）の長野地震の時大島サキと井上マサに連れられて来た三浦角、上田ヨネ」とあり、2名の女子の名前が記されていることから、大島サキと井上マサとが地震被災地から少女を連れ帰ったことになろう。以上の記述から二瓶氏は、濃尾地震救援活動がラッセル女史を揺り動かし、活水女園創設に繋がったと解釈している。『日本基督教団熊本白川教会百年史』年表の明治24年11月の欄に「大島婦人伝道師濃尾大地震負傷者看護のため該地に行く」とあり、大島サキが濃尾地震救援に携わっていたことは事実であり、史料の記述から活水女園の開設は濃尾地震救援活動が契機であった可能性は高いように思われる。

なお、『活水同窓会の歩み』に記される「長野地震」であるが、明治20年代に長野を震源とする大規模な地震は発生しておらず、二瓶氏が指摘するように「信濃」と「濃尾」を誤った可能性が高い。したがって、この記述は「濃尾地震」と捉えておきたい。

活水女園開設の契機は二瓶氏が指摘するように濃尾地震にあったと考え、その後、孤児収容人数が増加した原因は、『長崎県福祉の歩み』が記すように、明治26年来襲した台風被災者を考慮してもよいと考える。

このような災害状況により孤児となった子どもたちをエリザベス・ラッセルは、手を差しのべようと活水女園設立に至った。

2. 熊本での孤児院

熊本での白川女園の場所について、『近代熊本の女キリスト者たち』では、「大江町九品寺に孤児院を開いた。現在の白川教会に隣接した土地で白水女園と名づけられた」とあり、『日本基督教団熊本白川教会百年史』では、「日曜学校教師の中に下村白水女学校長とあるが、白水女学校とは明治26年ラッセルによって大江町九品寺に開かれたという孤児院「白水女園」のことと思われる」とある。これに対し、『長崎県福祉のあゆみ』では、「活水女園を熊本県長洲に創設し孤児となった女児15名を引き取った」とあり、その場所は、長洲であるのか、九品寺かで異なる。

なお、『熊本県史近代編2』等からわかる熊本県下における明治期の児童関連施設を挙げると、貧児寮（明治26年（1893）熊本市西坪井町に塘林虎五郎が設立、後に肥後慈恵会教育部）、天使園（明治27年（1894）熊本市南新坪井町にフィリベルト・マデ・ボルジア（フランスの聖嬰耶蘇会）が設立）、島崎育児院（明治33年（1900）熊本市花園町本妙寺境内にジョン・メリィ・コール神父が設立）、ナザレ園（明治33年（1900）八代市二の町にマリモルデュ・ウラリ（フランス聖ポーロ会修

道女) 設立) があるが、「白水女園」は児童関連施設としては見あたらない。

熊本での孤児院の場所については、先に述べているとおり、「明治 26 年有明海に台風が来襲し、口之津港の石炭船 70 隻を始め熊本県長洲港の漁船などに未曾有の沈没被害が発生した。ことに長洲方面の漁民のなかに路頭に迷う遺族が溢れ、多数の孤児が出た。このことを知ったエリザベス・ラッセル女史は、アメリカのクリスチャンの支援を受けて、1893 (明治 26) 年 9 月、「活水女園」を熊本県長洲に創設し孤児となった女児 15 名を引き取った。」とあるように当初は熊本県長洲であったかも知れない。そこでの滞在期間を記すものは見当たらないが、『王栄幼稚園創立 100 周年幼稚園創設期の歴史』の資料には熊本市九品寺に「白川女苑」設立とある。つまり現在の白川教会に隣接する幼稚園が孤児院としての白川女園とよばれていた場所となるであろう。

現在も白川教会に隣接するところに王栄幼稚園はあり、王栄幼稚園が幼稚園としての認可を受けるのは後のことになるが、幼稚園の玄関の壁には、写真 1 のとおり「創立 1893 年明治 26 年」と刻まれている。また、幼稚園の遊戯室には、歴代園長の写真が掲げられ、写真の下の方に「創始者エリザベス・ラッセル先生 長崎活水女子大学創始者」とある (写真 2)。写真 3 は、「第二代園長マーガレット・バーマイスター先生 1920 年～1934 年」とある。よってラッセル先生は、1893 年～1920 年初代園長をつとめていることになる。



写真 1 白川女園創立と同年 1893 年
写真提供：熊本白川教会



写真 2 創始者
エリザベス・ラッセル先生
長崎活水女子大学創始者
写真提供：熊本白川教会



写真 3 第二代園長
マーガレット・バーマイスター先生
1920～1934
写真提供：熊本白川教会

3. 熊本から古賀村へ

3-1 古賀村への移転の経緯

熊本からの移転となる要因と考えられることは、『女性史研究 特集近代の女キリスト者』に記されているように、孤児院の「借家賃料が高かった」ことにある。そこで、衣笠（旧姓大村）マスオは、「ラッセル先生が、熊本で孤児院を設立されたことを知り、財産の中から福岡県粕屋郡古賀村にある1万坪の土地を提供して恩師を応援した。」とあり、『活水学院百年史』では「12 エーカー (15,000 坪)」「活水同窓会の歩み』では「約1万坪」とある。いずれにしろ、古賀に衣笠マスオが所有していた広大な土地が準備されたことによる。写真4は、福岡県粕屋郡古賀村での活水女園の建物である。



写真4 活水女園 1898（明治31）5月新築 福岡県粕屋郡古賀村

出典：活水学院所蔵 資料番号 2-1-3-16-2-0

3-2 活水女園の位置等

長崎初男氏の資料によれば、中川のある場所をかつて「ヤソキョウ」と呼称したとある。これは明らかに地名ではなく、通称名であることは間違いない。その理由について「中川の西牟田外科の旧国道の向かいにキリスト教の孤児院が明治30年代にあり、その後長崎へ移った。大正年間にそのあとにホータイ会社に来てしばらく続いた。」と説明する。つまり、通称名「ヤソキョウ」は、キリスト教の孤児院があったことに由来することが分かる。また、孤児院の跡地にホータイ会社が開設されたことも確認できる。

一方『古賀町誌』では、「今のロジャースの向かい側に大正の初めころあった包帯工場（ガーゼ）、岡部機械工業のところに大正から昭和に初めころに焼酎会社（キンビンポートワイン）があった。」と記されている。

長崎初男氏の資料「ホータイ会社」と『古賀町誌』の「包帯工場（ガーゼ）」は同じ会社、工場と考えるが、その位置を『古賀町誌』では「今のロジャースの向かい側…」とあるのに対し、長崎初

男資料では「西牟田外科の旧国道の向かい」とあり、全く異なる記述となっている。どちらかが誤った情報と思われるがはっきりしない。ただし、包帯工場が西牟田外科そしてロジャース付近にあり、ここに活水女園があったことは間違いない。

そこで、図1、図2、図3に活水女園があったと考えられる場所を示す。

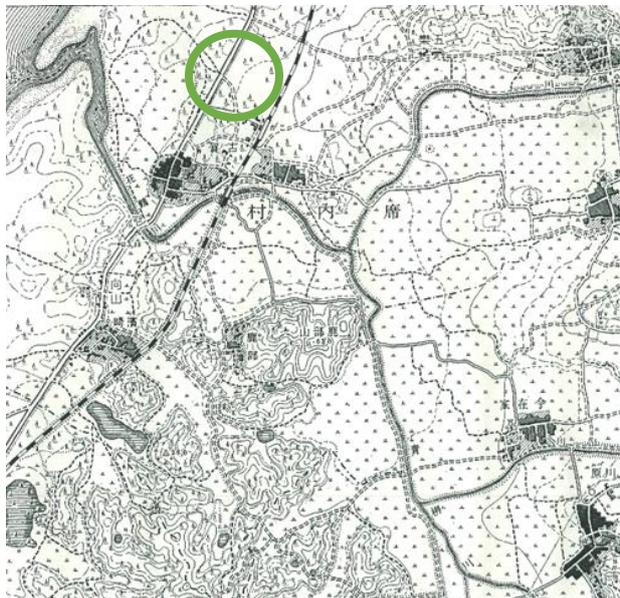


図1 活水女園の当時の場所
出典：『大日本帝国陸地測量部
明治33年測図 図副名「青柳」』



図2 活水女園があった場所
出典：『大日本帝国陸地測量部
大正15年測図 図副名「古賀」』

図1、図2は活水女園の範囲として地図上に○印を加え作成、図3も同様。
なお、図1では、松林が占めているが、図2、図3には建物等が見られる。



図3 図副名「津屋崎」大正11年測図
出典：『大日本帝国陸地測量部 大正11年測図 図副名「津屋崎」』

なお、『郷土筵内村』に「加工生産にして原料供給による工場は従来清酒会社及び石川組製糸工場及び日本繻帯会社等発達していたが現在においては休場を止むなきに至っている。」とあり、「ホータイ会社・包帯工場」は「日本繻帯会社」であったことが分かる。

『大日本帝国陸地測量部 大正15年測図(図副名『古賀』)2万5千分一 地図』(以下図2とする)を見ると、現在のニビシ醤油と岡部機械工業付近に工場の地図記号を見出せる。この時代、ニビシ醤油は前身の日本調味料醸造(大正8年10月1日創立)がすでにある。これに対し、岡部機械工業は昭和9年に古賀へ移転しており、この工場が岡部機械工業でない事は明らかである。また、『郷土筵内村』に記載のある石川組製糸工場は昭和5年開設で、図2には反映されない。

現在の西牟田外科を基点に200メートル四方程度で概観すると、文献等に大村マヌマ氏が寄付した土地は1万~1.5万坪との記述があり、よって、半径102~125mの範囲で確認すると、東側は鹿児島本線、西側は旧西鉄宮地岳線、南側は現在のサンリブ古賀付近、北側は榊正興電機製作所付近の範囲内となる。改めて図2を見ると、この範囲内で工場の地図記号が認められるのは、鹿児島本線と旧国道の間、そして西牟田外科より南側に工場がある。よって、図2によれば、現在の岡部機械付近に何らかの工場があったことが分かる。

『明治33年測図』(図1)と『大正15年測図』(図2)を対照し、現在のサンリブの国道495号を挟んだ向かい側に注目すると、図1では松林しか認められないが、図2では建物等があることが分かる。『古賀町誌』の記述「今のロジャースの向かい側」を国道495号とは無関係にロジャースの南側附近と捉えれば、この建物が包帯会社となる。該当する可能性はある。また、長崎氏の資料「西牟田外科の旧国道の向かい側」からは距離があるように思うが、1万坪の敷地が広がっていたと考えれば同一の場所を指したと考えられる。いずれにしろ、記述に正確さを欠き繻帯会社の場所を指示する土地はわからない。

4. 土地の寄贈者衣笠マスオの関係者

古賀村の土地、約1万坪、あるいは15000坪を寄付できた衣笠氏あるいは大村氏は、いずれにしても古賀村において普通に見られる姓ではない。したがって、在郷の者ではなく、かつ古賀に居を構えることもなかったと考える。しかしながら、広大な土地、ただし、寄付したと考えられる土地は、地形環境や地勢等から農地ではなく、山林、松林であったと考えられる。その場所を寄付できたのは土族で、かつキリスト教に関係する人物であろう。

そこで、『日本聖公会福岡教会百年史』に「教会堂建設は信徒が総力を挙げて立ち向かったものであるが、教会の柱であった衣笠景徳の力も大きかった。衣笠景徳は黒田藩主の家来衣笠家17代子孫として1853年(嘉永6)、福岡市警固町に生まれた」とあり、想定に合致する人物を認めることができる。また、「出身地である嘉穂郡相田村(現飯塚市)の私有地(20町歩)を提供し、愛太聖公会設立に力を注ぎ、他方九州大学敷地のため、所有地を寄付するなど、社会奉仕にもつとめた。しかし、衣笠が自己所有の土地を提供し、設立した愛太聖公会も現在はその跡形もない」とある。『飯塚市史』の「キリスト教徒の墓」の項に「旧宮田町夫婦木出身で十七銀行若松支店長衣笠景徳の力が大きく、住民の支持もあって、明治33年に相太教会を作り上げた」とあり、「上相田集落の入り口左側高台にクリスチャン衣笠家の墓地があり」と記され、これら記述を踏まえ、現地調査を実施することとした。

5. 現地調査

5-1 飯塚市上相田集落の衣笠家墓地の調査(2021年9月24日)

衣笠家墓地は嶺家所有地の山林・果樹園内にある。

コンクリートブロックで区画されたその内部に、墓石が横一線で配列されている。以下は、入口

部から順に記録した墓石である。なお、『飯塚市史』には墓石が5基並んでいるとされているが、4基しか確認することができない。

墓碑銘は下記の通りである。

- 十字架（印刻）衣笠景德 テウ之墓（正面）
永眠 昭和6年8月28日 景德78才
大正13年6月25日 テウ66才（背面）
神は愛なり（右側面）
昭和36年4月吉日 遺族一同建立（左側面）

- 十字架（陽刻）衣笠ますを之墓（正面）
永眠 大正9年 米國シアトルにて（右側面）
昭和36年4月吉日 有志一同建立（背面）

- 十字架（印刻）衣笠有道 道子之墓（正面）
昭和39年9月吉日建立
衣笠道子親族一同（背面）
昭和16年2月5日 永眠（左側面）

- 衣笠有光之墓（正面）
昭和21年9月6日 衣笠有子建立（背面）

以上、各墓碑銘を整理すると次のようである。

没年を見ると、「衣笠ますを」の大正9年を最古とし、大正13年（6月25日）の「衣笠テウ」、昭和6年（8月28日）「衣笠景德」と続き、最新は昭和16年（2月5日）の『衣笠有道・道子之墓』がある。「衣笠有道・道子」の墓は夫婦墓との確証はないが名を併記している。しかしながら、没年の記載は一つのみである。また、「衣笠有光」は没年の記載がなく、またこの墓碑のみ十字架が刻されていない。

次に建立時期を見ると、一番古いのは『衣笠有光之墓』の昭和21年9月6日で「衣笠有子」が建立。続いて昭和36年の同年同月（4月吉日で日はわからないが、多分同日であろう。）建立の『衣笠景德・テウ之墓』『衣笠ますを之墓』がある。前者は「遺族一同建立」、後者は「有志一同建立」で建立主体が異なるような体裁をとる。最新は昭和39年9月吉日の『衣笠有道・道子之墓』で、これは「衣笠道子親族一同」が建立とある。

「衣笠有光」の没年はわからないが、建立時期に近い時期に没している可能性がある。例えば戦没等が考えられる。

『衣笠ますを之墓』は没後41年を経て建立していて、顕彰記念碑的性格のものかもしれない。

以上、墓碑銘から衣笠家の関係について考えてみる。

まず、衣笠景德と衣笠テウは夫婦で、衣笠ますをは旧姓が大村であることが他の文献から分かっており、景德・テウの義理の娘の可能性が高い。衣笠有道と道子も夫婦と考えておきたい。衣笠景德・テウ夫婦との関係は分らない。衣笠有道は衣笠景德・テウ夫婦の子である可能性は高いと考える。景德の子には、四男ジョン（譲）、長女ロダ（老太・のち天野徳丸司祭夫人）、五男イサク（意作）、六男パウロ（保良）等が多くの子供がいたことは分かるが、有道は現在のところ把握できていない。衣笠有子と、衣笠有道は「有」の字通から衣笠有道・道子夫婦の子ども、もしくは衣笠有道のきょうだいかもしれない

なお、この現地調査の結果、古賀への活水女園移転の契機となった土地寄付者「衣笠マスヲ」は「衣笠景德」の縁者であることが確認できる。

以下に衣笠ますをの墓碑を掲載する。



写真5 衣笠ますを之墓
上部に十字架



写真6 衣笠ますを之墓



写真7 永眠大正九年
米國シアトルにて

5-2 相田集落での聞き取り調査（2021年11月19日）

以下の3人の方より聞き取りを行った。

嶺さん

小島さん 1929（昭和4）年生まれ

肘井さん 1932（昭和7）年生まれ

「衣笠家の墓地がある山は、現在嶺家の所有地であるが、元は衣笠家の土地で、この付近はほとんど衣笠の土地だった。」

「衣笠家はコウザ（口座）が掛けられなかったため没落して、土地の上（かみ）の方を北川家、下（しも）の方を嶺家が所有することとなった。」

「教会は、嶺家所有の山の上にあった（現在の衣笠家墓地の付近）。日曜学校があって、子どもの時には、肘井さんの家の前の道を通って教会へ行っていた。小学校に入る頃まではあったと思う、何か行事のようなものもあったように思うが、はっきり覚えていない。」とのこと。

嶺さんのご主人のおじいさんの頃に墓を建てたいと相談があって、現在のところに墓が建てられた。「しばらくは奈良から毎年墓参りが来ていたが来なくなり、その後、教会の関係者が度々来ていたが、来なくなっている。」とのことである。

5-3 相田の衣笠家の土地と教会

『耕地三町歩以上所有者名簿（昭和3年3月）』『嘉穂郡二瀬村 相田』には、嶺良一・肘井徳治・北川磯吉を見出す。また、『耕地三町歩以上所有者名簿（昭和6年12月）』『相田』は、嶺良市・肘井徳次・北川磯吉となっている。

『福岡県一圓富豪家一覧表（明治33年度調査）』『嘉穂郡二瀬村』分の相田には肘井氏しか見られない。小島さん等から衣笠家の没落後、相田の上の方を北川家、下の方を嶺家が所有したとお聞きしたが、『耕地三町歩以上所有者名簿（昭和3年）』から衣笠家所有分であったろう相田の土地は、昭和3年には、嶺・北川両家の所有となっていることが分かる。

『飯塚市史』には「昭和5年（1930）衣笠景德がこの地（相田）を離れると相太教会も姿を消していった」とあり、昭和5年頃に教会はなくなっているように受け取れるが、先に見た『耕地三町

歩以上所有者名簿（昭和3年）』では、昭和3年時点で土地所有は移っている。『あかしびとたち－日本聖公会人物史－』では「衣笠氏の没後（昭和6年）次第に（教会は）さびれ、戦時中に全く壊滅してしまった（カッコ内は筆者記入）」とあり、聞き取り調査でも昭和7年生まれの肘井さんが、教会へ行っていたとのことで、土地の所有は移ったものの、教会はその後数年存続し、戦時中に姿を消したのであろう。

なお、墓地の現地調査から1946（昭和21）年9月6日が最も古い建立年であるが、この墓地建立が、嶺家の曾祖父に相談のあった時期を指すのかは分からない。時期的には昭和21年でもよいと思われるが、昭和36年4月には『衣笠景德・テウ之墓』『衣笠ますを之墓』が建立されており、この時期を指すのではないだろうか。

また、『福岡県一圓富豪家一覧表（明治33年度調査）』『遠賀郡之部若松町』を見ると、「等級91（金高1,300）衣笠景德」を認める。したがって、明治33年段階では、一覧表に名を上げる多額納税者であったことが分かる。※所得金高別に等級を付け、6万円（1号）～300円（165号）とするもの。

ところで、明治35年、十七銀行は支払停止をしており存続危機にあった。翌明治36年経営母体を変更し営業を再開するが、衣笠景德が支店長を務めていた若松支店は明治38年に廃止されている。このようなことが、聞き取り調査での『コウザ（口座）をかけられなかった』につながるものであろう。なお、この前年の明治37年には、衣笠景德の後ろ盾であった小河久四郎も十七銀行頭取、そして役員待遇からも退いており、衣笠景德も明治37年頃には十七銀行の経営から退いていた可能性も考えられる。

6. 衣笠（大村）マスオについて

明治期の同窓会名簿から大村マスオ1892（明治25）年、活水女学校高等科を卒業である。母校での勤務について、『活水学院百年史』の旧職員名簿では、就任年月明治25年9月、退任年月明治32年12月と掲載され、職名については記されていない。

『活水五十年史』に「直接伝道に従事し、前後二回渡米せられ神国建設に心血を注がれたが、早く永眠せられた」とあり、『同窓会名簿』では「大正10年死亡」とある。一方、飯塚市上相田の衣笠家墓地にある『衣笠ますを之墓』は「永眠 大正9年 米國シアトルにて」とある。「衣笠マスヲ（ますを）」は同一人物と考えられ、かつ墓碑から渡米中に亡くなったと考えられるが、没年の年数は異なる。写真5、写真6、写真7参照。

また『あかしびとたち－日本聖公会人物史－』の衣笠景德の項には「景德氏には実子の外、信仰の故に家を追われた物を三人養女として教育したが、その一人は後に渡米、シアトルで東海林司祭の下に婦人伝道師となり忠実な働き人として仕えた」とある。養女の名は記されていないが、「シアトル」そして「伝道に従事」等から大村マスオの可能性が高い、よって、大村マスオは何らかの理由で衣笠景德の養女となっていたのであろう。

なお、『福岡女学院百年史』に1888年（明治21）9月10日の英和女学校落成開校式の次のような記載がある「1888（明治21）年、9月11日の『福陵新報』に、その日の有様を次のように報じている。「英和女学校の開校式 兼て福岡天神丁に新築中なりし英和女学校は工事全く落成を告げ、昨十日を以て開校式を挙行したるが…（略）…長崎活水学校生徒大村マス子祝文…」」。大村マスヲは、明治21年の時、高等科在籍中であり、この祝文を読み上げた「長崎活水学校生徒大村マス子」は、「大村マスヲ」の誤植であろう。したがって、これも同一人物であったと考えられる。

7. 衣笠景德について

『あかしびとたち－日本聖公会人物史－』から以下の掲載がある。

「嘉永6年（1853年）5月黒田藩士族として福岡市警固に生まれた。十七才の時西南戦争が起こ

り、山形有朋に従って鹿児島に出征した。福岡の法律学校に学ぶ。夫人の影響により信仰をもち、志を実業家に向け、大阪在職中聖公会第一総会に出席した。福岡アルパ教会を計画し、九州大学の敷地に所有地を寄付。五十才で事業を引退。その数年前に愛太教会を建設。昭和六年七十八才で飯塚市相田の地で逝去した。」また、同書に「衣笠景德氏の葬送式は九州地方部葬として、時の地方部主教アーサー・リー自ら司式して行われた。安政6年ウイリアムス師の長崎上陸と共にはじめられた九州教区史には、今日に至るまで教区葬をもってその生涯を飾られた者は、他に一人も見当たらない。この一事をみても、衣笠景德氏の信仰生涯が偲ばれるであろう」と記されていて、非常に貢献大であったことがわかる。また、ハンナ・リデルが1895年熊本黒髪村に設立した熊本回春病院（ハンセン病療養施設）の土地購入に関しても衣笠景德の名があり、実業家としての側面はもちろんあるが、福岡県下に留まらない教会への献身的な働きが見られる。

したがって、衣笠マスオの義父衣笠景德の財産の一部が古賀村にもあり、それが活水女園の用地として寄付されたのであろう。しかしながら、先に記したように明治35・36年の十七銀行の改組により、衣笠景德は十七銀行の経営から退くこととなり、また『あかしびとたち—日本聖公会人物史—』に「十七銀行の資本の支柱は黒田家であったため、景德氏は黒田家財産を守るために私財をこれに当てた」とあることから、このようなことも活水女園が大村へ移転しなければならなかった原因の一つであったかも知れない。

8. 衣笠ハツ

先に衣笠景德について述べているが、「氏の入信は、妻と長姉の感化によるものである。長姉は、長男義介氏を出産後、それを里子に出して単身長崎に赴き、メソジスト系の活水女学院に学びメソジスト系教会員となった。」と、これも『あかしびとたち』の衣笠景德の項に記されている。そのことから、メソジスト系の銀屋町教会へ問い合わせたが、衣笠ハツの名前は見当たらない、とのことで、同じくメソジスト系の飽の浦教会へ問い合わせしてみたが、原爆によって資料はなくなってわからない、ということであった。よって現時点では確認することが困難である。

衣笠ハツは、同窓会名簿に掲載があり、1900（明治33）年活水女学校中等科卒業、さらに1903（明治36）年活水女学校高等科卒業とある。

また、『活水学院百年史』に掲載されている衣笠ハツは、1904（明治37）年1月から1906（明治36）年7月まで助教として勤務していることになる。

9. 古賀村から大村へ

『活水五十年史』には「明治31年漸く落成献堂の式を挙げた。此資金を得るためラッセル女史は英文に認めたる長文の檄（アピール）を「活水女学」第8号で発表された。惻々として人を動かすものがある。併し2年の後又事情があつて大村に移すことになって、全部を取毀して22輛の貨車に積んで大村へと運ばれ、現在の大村女園の位置に建築せられたのである。爾来大村女園と称せられた。」「更に菅沼元之助氏及メーリー氏は始終金員を寄与して女史の此事業を援助せられたのである。終にラッセル、菅沼両氏が相当の財産を共同提供して、明治卅九年五月「大村活水女園」と称する財団法人を組織し、基礎が堅固になった。」

なお、『活水学院75周年誌』に掲載されている「大村女園」の建築物の写真を見ると、洋風建築物であることが分かる。「大村女園」は古賀村にあった建物を解体し運搬されて建築も解体もすべてラッセル女史があたり、そのものの資材を用いて再建されていることが分かっており、規模はもちろん外観等もさほど変更はないようである。

「この校舎も今は余程腐朽したので改築が計畫せられて居る。」とあり、『活水五十年史』刊行時点の昭和4年（1929）にはまだ現存していたことがわかる。

古賀村から大村への移転の理由として考えられることは前述のとおり、景德の事業を整理する必

要から活水女園の手放すことに至ったことが考えられる。

『活水学院百年史』によると、「ラッセル女史が熊本に起こした孤児救済の事業は、福岡市郊外古賀に土地が与えられ、施設を作って経営を続けていたが、一九一六（明治 39）年長崎県大村玖島郷に移ることになった。そこに七〇〇余坪の土地を得て、古賀の建物を取りこわして二二輛の貨車で運んで再建した。これが大村活水女園といわれた。経営は、資金面では、はなはだ困難であった。女史は自らその重みをおいながら、多数の人にも援助を訴えた。そして菅沼元之助氏とその夫人メリー女史は、終始この事業を助けた。一九〇七（明治 40）年五月この女園は財団組織となり、その基礎を安定した。」との記載がある。

大村の移転先の場所については、『活水学院と長崎プロテスタント教会の百二十年』には、一九〇六年（明治三九）長崎県大村玖島郷（現、日本キリスト教団大村教会）へ移転とある。そこで、大村教会を訪ねると、この教会の土地は活水学院のものであったと説明を受けた。

つまり、古賀村からの移転先はこの地でしかなかったのかも知れない。



写真 8 kwassui JoEn ; Girls Home

大村活水女園 1906（明治 39）年古賀村より移転

出典：活水学院所蔵 資料番号 2-1-3-16-4

写真 8 は、玄関前に、子どもたちの姿も見られる。先に述べたとおり古賀村での建物を解体して貨車 22 輛に積み込んで大村へ運んで再建していることから、建物の外観、構造は、写真 4 の活水女園の建物と共通していることが分かる。その後は、大村活水女園財団法人となっている。

活水学院所蔵の「大村活水女園財団法人原本」資料番号 2-1-3-16-2-0 の書類からは、財団法人創立許可願が、明治 39 年 5 月 26 日付けで内務省に提出され、そして明治 39 年 11 月 24 日内務省より許可されていることが確認できる。

おわりに

本論文推敲にあたり、まず活水女園の起点となる災害状況を詳細に述べている。この災害につい

ては、濃尾地震での被害の大きさ、とりわけ子どもたち、なかでも女兒へ手をさしのべる必要にあったことが活水女園開設の契機につながったと考える。その原動力となったのは、災害時活水学院の卒業生の働きであり、子どもたちの救護のみならず、その後も子どもの養護そして教育にあたっていることが理解できる。

活水女園の歴史は、これまでにないほどの女性の活躍、そして孤児となった女兒への教育につながっていることに改めてその偉大さがみえてくる。

今回、「活水女園の変遷を支えた人たち」その歴史から何を学ぶのかが課題である。今後に向けて特に災害、そして戦争等により孤児となった子どもたちへの養育その後の教育までつないでいこうとする力が今日に至っても求められていること。そのことが、活水学院創始者ラッセル先生が成し得たことであり、活水学院の建学の精神であるとともに、キリスト教の教えに立脚しているものと確信できる。

年表

西暦	和暦	活水学院関係	卒業生	衣笠景德 関係事項	社会情勢 災害等
1792.5.21	寛政 4				島原地震（島原大変肥後迷惑） M6.4 津波最大 9 m 死者数 1 万 5 千人 島原地震
1853.5	嘉永 6			福岡市警固に生まれる	
1879.11	明治 11	ラッセル・ギール両氏長崎着任			9 月学制を廃し、 教育令公布
1879.12	明治 11	東山手に活水学院開校			教育令改正
1881	明治 14	ラッセルは聖書、ヨハネによる福音書 4 章 10 節から校名を「活水」とする			
1885.5	明治 15	ギールは、福岡に学校創設のため赴く			
1885.6	明治 18	福岡英和女学校（現福岡女学院設立）	英和女学校落成開校式の時大村マス子（マスオ）祝文		
1886	明治 19				3 月帝国大学令公布 4 月師範学校令、 中学校令公布
1888.6	明治 21	神学科第 1 回卒業生 5 名を出す	岡島ハツネ 川久保トク 井上マサ 大島サキ 柴田ハル		

1889.7.28	明治 22				熊本地震 M6.3 死者数 20 人
1890.9.28	明治 23				国鉄古賀駅開通
1890.10					教育勅語発布
1891.10.28	明治 24				濃尾地震 M8 死 者数 7,273 人
1891.11.16	明治 24		大島サキ、井上 マサ濃尾地震負 傷者救援のため 震災地へ赴く		
1892	明治 25		活水同窓会創設		
1892	明治 25		衣笠（旧姓大村） マスオ 活水女学校高等 科卒業		
1893.9	明治 26	長洲に孤児院を 設く。 熊本に白川女園 を設く			
1893.10.13 ～16	明治 26				台風 死者数 1,719 人以上
1894.8.1	明治 27				日清戦争
1895.4.17	明治 28				日清講和条約 （下関条約）調 印
1896.6.15	明治 29				明治三陸地震津 波 M8.5 津波最 大 38.2m死者数 26,360 人
1898.5	明治 31	古賀村に新築・ 移転。活水女園	衣笠（大村）マ スオより土地の 寄贈		
1898.1	明治 31	活水学院音楽部 最初のリサイタ ルを公開			
1900	明治 33			衣笠ハツ 活水女学校 中等科卒業	
1902	明治 35			十七銀行支払停 止	
1902.4.24	明治 35	慈善音楽体操会			
1903.1.20	明治 36				国鉄大村駅開通
1903				衣笠ハツ 活水女学校 高等科卒業	
1903	明治 36			十七銀行営業再 開	

1904.2.10	明治 37				日露戦争
1905	明治 38			十七銀行若松支店廃止	
1905.9.5	明治 38				日露講和条約・同追加約款（ポーツマス条約）調印
1906.3	明治 39	古賀村の建物を取りこわし全てを古賀駅より貨車22輛に積み込み大村玖島へ移転。大村活水女園			
1906.5	明治 39	大村活水女園を財団法人に組織。			
1917.11.28	大正 6		大島サキ永眠		
1920	大正 9		衣笠マスヲ永眠		
1924.6.25	大正 13			衣笠テウ（景德の妻）永眠	
1931.8.28	昭和 6			衣笠景德永眠	

謝辞

本論文推敲にあたり、飯塚市での聞き取り調査に協力いただいた方々、日本キリスト教団大村教会、熊本白川教会、王栄幼稚園、銀屋町教会、飽の浦教会、活水女子大学図書館、活水女子大学同窓会事務局、活水女子大学総合企画室の方々にご協力いただいた、ここに記して感謝申しあげる。

参考・引用文献

- 1) 活水女学校・活水女子専門学校『活水五十年史』活水女学校 1929
- 2) 席内小学校『郷土席内村』1934
- 3) 十七銀行『株式会社十七銀行六十年史』1940
- 4) 学校法人活水学院『活水 75 年の歩み』学校法人活水学院 1954
- 5) 熊本県『熊本県史 近代編第二』熊本県 1962
- 6) 日本聖公会歴史編集委員会『あかしびとたち－日本聖公会人物史』日本聖公会出版事業 1974
- 7) 大分放送・大分百科事典刊行本部『大分百科事典』株式会社大分放送 1980
- 8) 活水学院百年史編集委員会『活水学院百年史』活水学院 1980
- 9) 光永洋子「近代熊本の女キリスト者たち」『女性史研究』第14集 共同体社 1982
- 10) 佐賀新聞社・佐賀県大百科事典編集委員会『佐賀県大百科事典』佐賀新聞社 1983
- 11) 長崎新聞社・長崎県大百科事典出版局『長崎県大百科事典』長崎新聞社 1984
- 12) 長崎初男「古賀町の歴史」1984
- 13) 熊本白川教会百年史編集委員会『日本基督教団熊本白川教会百年史』日本基督教団熊本白川教会 1985
- 14) 古賀町誌編さん委員会『古賀町誌』古賀町 1985

- 15) 明治ニュース事典編纂委員会・毎日コミュニケーションズ出版部『明治ニュース事典 第5巻 [明治26年—明治30年]』1985
- 16) 活水同窓会『活水同窓会の歩み』秋永暉子 1987
- 17) 長洲町誌編纂委員会『長洲町史』長洲町 1987
- 18) 福岡女学院百年史編集委員会『福岡女学院百年史』学校法人福岡女学院 1987
- 19) 日本聖公会福岡教会福岡教会百年史編集委員会『日本聖公会 福岡教会百年史』日本聖公会福岡教会 1989
- 20) 長崎県社会福祉事業史編集委員会『長崎県福祉のあゆみ—長崎県社会福祉事業史—』長崎県 1997
- 21) 国会資料編纂会『日本の自然災害』国会資料編纂会 1998
- 22) 『都道府県別資産家地主総覧 福岡編1』(株)日本図書センター 1999
- 23) 『都道府県別資産家地主総覧 福岡編2』(株)日本図書センター 1999
- 24) 日本基督教団長崎銀屋町教会『長崎銀屋町教会百年史(第1部)』1999
- 25) 中谷彪・小林靖子・野口祐子『西洋教育思想小史』晃洋書房 2006
- 26) 日本キリスト教団大村教会『60年の歩み—伝道が開始されて113年大村講義所開設から102年—』日本キリスト教団大村教会 2007
- 27) 『日本災害事典 1868—2009』日外アソシエーツ(株) 2010
- 28) 柿山哲治「活水女学校における体育の始まり」活水論文集 第53集 2010
- 29) 北原糸子 松浦律子 木村玲欧『日本歴史災害事典』吉川弘文館 2012
- 30) 吉田幸恵「社会的養護の前史—明治期における児童救済事業の展開」名古屋市立大学大学院人間文化研究第17号 2012
- 31) 森泰一郎「初期活水学院の三人の娘たちと近代日本—神近市子 中山マサ 北島艶の歩んだ道—」長崎ウェスレヤン大学現代社会学部紀要12巻1号 2014
- 32) 飯塚市史編さん委員会『飯塚市史 下巻』飯塚市 2015
- 33) 大村市史編さん委員会『新編大村市史 第4巻 近代編』大村市 2015
- 34) 新田尚 監修『気象災害の事典 日本の四季と猛威・防災』朝倉書店 2015
- 35) 二瓶浄幸「大島サキと活水における最初のリバイバル」活水論文集 第58集 2015
- 36) 塩野和夫「宝が隠されている—キリスト教学校に学ぶ、教える—」西南学院大学 国際文化論集 第31巻第1号 2016
- 37) 入間市博物館『石川組製糸ものがたり』入間市博物館 2017
- 38) 前田志津子「古賀村と活水女園についての検討」活水論文集 第64集 2021
- 39) 資料 前田哲之助 資料『長洲の漁業』
- 40) 資料 前田哲之助 資料『町民の長洲町史』
- 41) 資料 『王栄幼稚園創立100周年幼稚園創設期の歴史』